

THE LOSS OF [kw] AND [gw] IN THE SAN'IN DISTRICTS OF JAPAN

Kikuo Maekawa

Summary

Middle Japanese had a pair of labialized velar consonants, [kw] and [gw]. These consonants called *gōyō'on* were used only in some word classes of Chinese origin. In present-day Japanese, these consonants can be found only areal dialects including the *San'in* districts. In this paper the author tried to find out the linguistic, not sociological, factors influencing the ongoing loss of *gōyō'on* in *San'in* districts.

The linguistic maps of /kwazi/(fire) and /suikwa/(watermelon) show that there is great difference in the distribution of [kw] according to lexical items. The multiple regression analysis of 30 lexical items containing *gōyō'on* reveals that difference can't be explained by means of the phonemic conditions. The process of ongoing loss seems to be the so called lexical diffusion.

The last problem discussed is why the distribution of /kwazi/ is by far greater than that of /suikwa/ in many mutually independent dialects. The author suggests the possibility that the difference can be explained by means of informants' degree of awareness of the relation that such and such morphemes are represented by their corresponding Chinese logographs.

合拗音消滅の言語的要因

——山陰での言語調査から——

前川喜久雄

0. はじめに

中世日本語において漢字音として音韻体系内に一旦定着した合拗音は現在の標準的な日本語からは完全にその姿を消してしまっている。しかし、今日でも東北、北陸、山陰、近畿・四国の一部、九州一円などには方言音としてア列合拗音[kwa][gwa](以下、単に合拗音と呼ぶ)が残存している。この小稿では進行中の音変化としての合拗音の消滅(共通語化)過程にどのような要因が介在しているかを論じている。進行中の音変化の要因といえば、年齢などの社会的要因も考えられるが、ここでは対象を老年層に限って言語体系内の要因を考えることにする。

1. 利用する資料について

1984年以来、筆者は鳥取大学教育学部の学生有志の協力を得て鳥取・島根両県の言語地理学調査を進めている。1986年には鳥取県東伯郡赤碓町(Map 1のA)から同西伯郡淀江町(Y)に到る地域のほぼ全集落を訪問し、老年層・生え抜きのインフォーマント 125名から教示を得ることができた。この地域には東条操の方言区画案に言う雲伯方言と東山陰方言との境界線が走っており、西から東へと移動するにつれて雲伯方言の特徴であ

る合拗音が消滅し、標準語的な[ka][ga]に移行することが予想された。そこで、過去2年間の調査票に含まれていた「火事」「西瓜」「正月」「元日」の4項目に加えて「火曜日」「消火器」「図画」「やかん」「外人」「貨車」を合拗音項目として採用し、更に調査の最後に30の単語・短文からなるリストをインフォーマントに音読してもらった。以下ではクイズ方式で面接調査を行なった「火事」～「貨車」をインタビュー項目、文字を音読したものをリスト項目と呼びわけている。

2. 合拗音の地理的分布

Map 1 にインタビュー10項目における合拗音の残存率を示した。調査地域の西に残存率の高い地点が集中し、東に0%の地点が集中するのは先述の予想どおりであるが、その他に東西を問わず海岸沿いに0%が分布し、内陸に向かうと残存率が上昇する傾向が認められる。これは方言区画上の対立とは別に、現在進行中の共通語化の影響が交通の中心である海岸沿いに現われたものと考えられる。

問題を東西の対立に戻そう。合拗音はあるラインで急激に消滅しているわけではない。実態は100%から0%に向けて、西高東低の漸減パターンである。そしてこのことは各調査項目間で相当著しい分布領域のちがいがあを意味している。Map2,3 にインタビュー項目「火事」と「西瓜」の分布を示したが、合拗音が記録されたのは前者が65地点、後者が19地点と大幅に食い違っている。また、「西瓜」の場合には分布が内陸部に限られてしまうことも注目してよい。他の地図は掲載をひかえるが、合拗音の分布領域は地図ごとに多少とも相違している。言語地理学ではこのような事態をさして、chaque mot a son histoire のスローガンを唱えるわけだが、果して合拗音の共通語化は語によって全く個々バラバラなのだろうか。

一体、「火事」「西瓜」を比較すると前者において合拗音が強く残存することは、山陰にのみ限られた現象ではない。日本言語地図(LAJ)の解説は、

「スイカ」の—KAは「カジ」に比べると唇音の[kwa]の勢力が弱い。母音に続くという環境の違いもあろうし、また、語による違いもあったかと思われる。

(各図の解説1, p. 2)

と述べている。LAJと並ぶ代表的言語地図である瀬戸内海言語図巻でも全く同じ現象が記録されているし、糸魚川の早川流域でも同じ現象が観察されている。¹ このような諸資料の一致は、やはり偶然とは考えられず、合拗音の消滅過程には組織的に記述可能な何らかの言語内的要因が一貫して介在しているものと見てよいだろう。しかし、その要因が青年文法学派の音韻法則や生成文法の変形規則のようなカテゴリカルな性質のものでないこともまた明らかである。

3. リスト項目の統計的分析

表1に示したのはリスト項目でインフォーマントに音読してもらった文面と項目毎の合拗音の出現頻度(FREQ)および各項目で合拗音がどのような音声的環境に置かれているかの分類である。項目24, 25は同一の短文内に配置されている。とりあげた環境は以下の4種類であり、表1にはアルファベットの略号で示した。①V:合拗音が無声(-)か

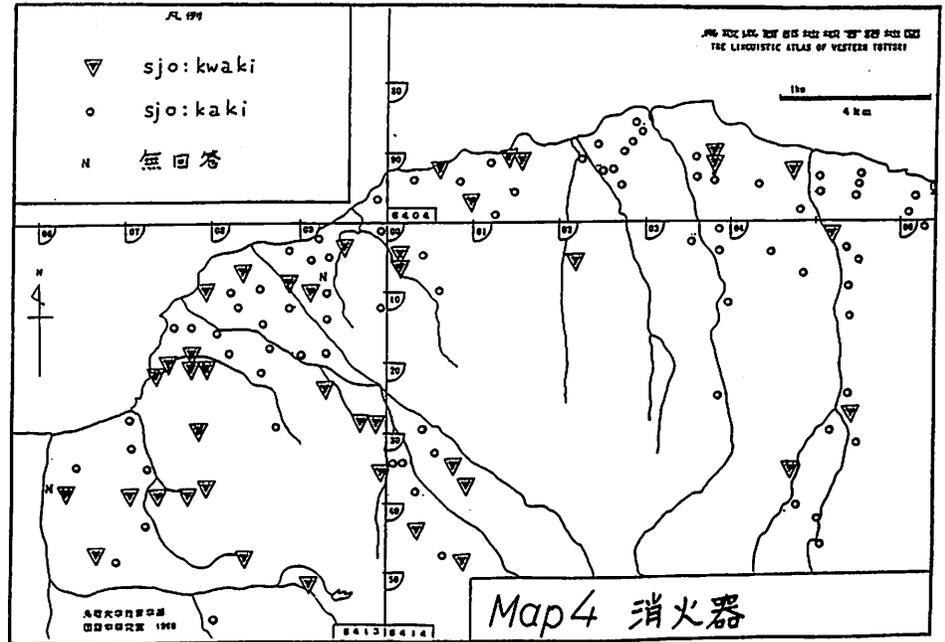
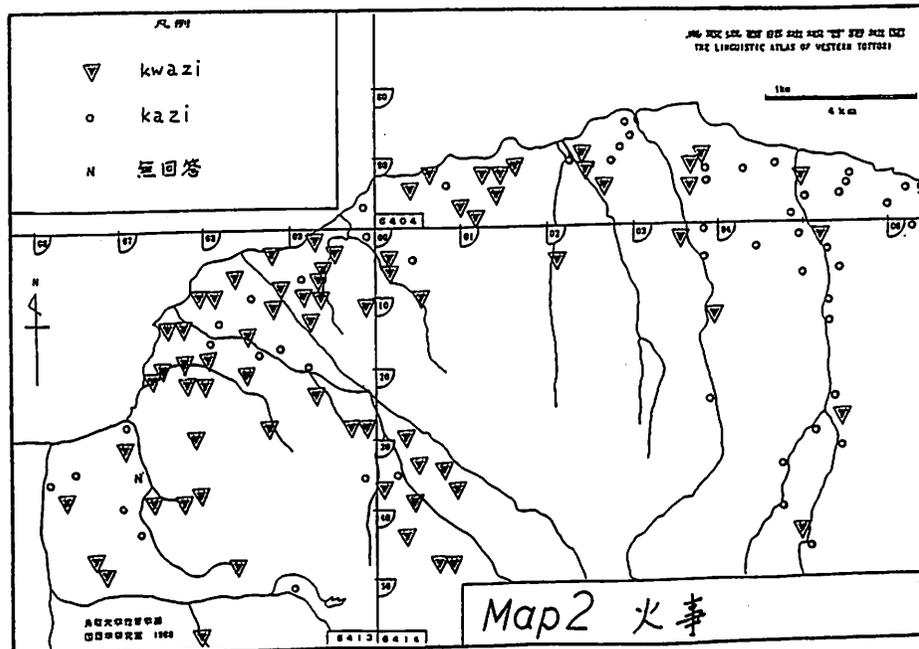
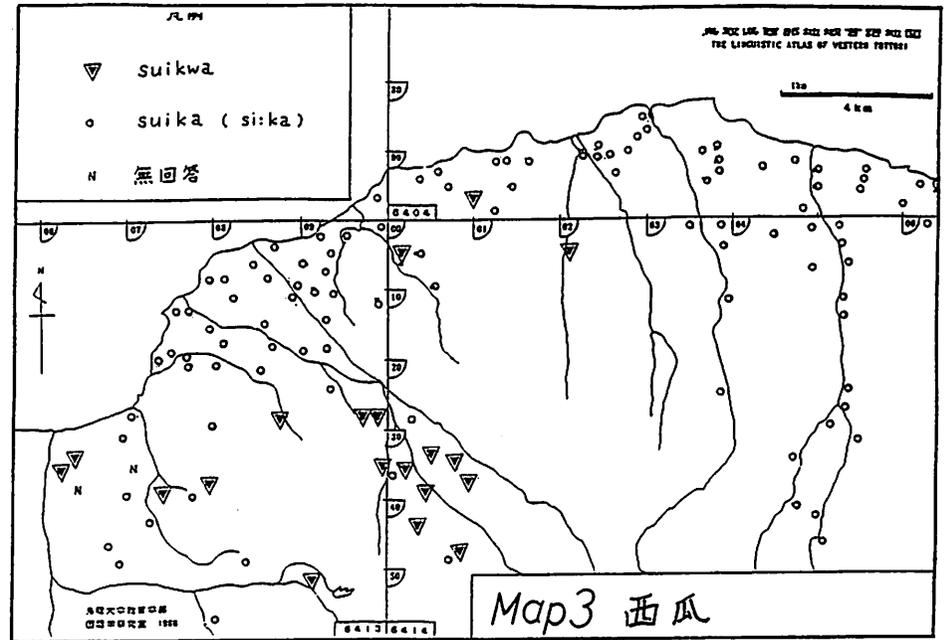
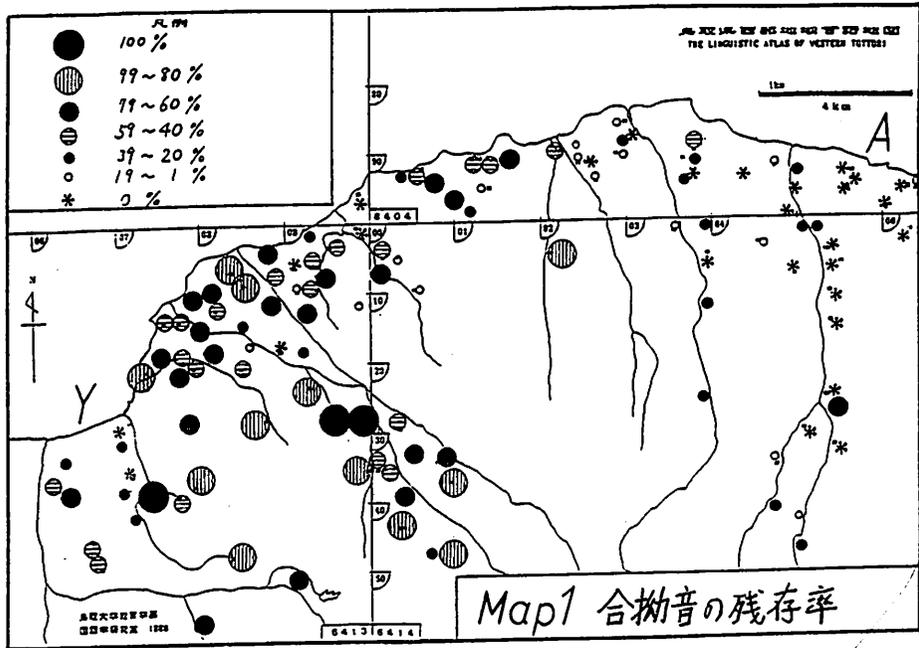
有声(+)か。②WI:合拗音が語頭に位置するか(+)否か(-)。③FS:形態素内部で合拗音に後続する分節音。ここで設定した形態素境界の位置は實際上漢字の切れ目と一致している。④PS:合拗音に先行する分節音。#は合拗音が発話の先頭に置かれていることを意味しており、PS=#ならば、自動的にWI=+である(逆は成り立たない)。表1の一番右に示したのは合拗音が含まれている漢字の字母である。

①~④および漢字の字母は項目毎に値が定まる2値もしくは多値のカテゴリ変数とみなすことができる。以下の議論ではこれらを環境変数あるいは単に変数と呼ぶことがある。

表1 リスト項目とその分類

番号	リストの文面	FREQ	V	WI	FS	PS	漢字
1	公民館に集まる	38	-	-	aN	N	館
2	海外旅行	33	+	-	ai	i	外
3	火事になった	73	-	+	a	#	火
4	貨車にのる	53	-	+	a	#	貨
5	火曜日	50	-	+	a	#	火
6	友達と喧嘩した	30	-	-	a	N	嘩
7	眼科の先生	19	-	-	a	N	科
8	薬かんでお湯をわかす	7	-	-	aN	a	
9	米と着物を交換する	33	-	-	aN	o	換
10	兵隊に志願する	34	+	-	aN	i	願
11	関東地方	32	-	+	aN	#	関
12	正月になった	24	+	-	atu	o	月
13	議会がはじまった	29	-	-	ai	i	会
14	アメリカとの外交	38	+	+	ai	o	外
15	科学者	30	-	+	a	#	科
16	図画の時間	34	+	-	a	u	画
17	観音様をおがむ	38	-	+	aN	#	観
18	消火器で火を消す	38	-	-	a	o	火
19	ガソリンに引火した	40	-	-	a	N	火
20	関西地方	28	-	+	aN	#	関
21	クラブ活動	17	-	+	atu	u	活
22	飛行場の滑走路	19	-	+	atu	o	滑
23	環境が悪い	24	-	+	aN	#	環
24	意外な結果	33	+	-	ai	i	外
25	意外な結果	38	-	-	ai	Q	果
26	野球は九回まであります	32	-	-	ai	u	回
27	バスの回数券	44	-	+	ai	o	回
28	有名な画家	44	+	+	a	a	画
29	自信過剰の人	39	-	+	a	N	過
30	外人と英語で話す	39	+	+	ai	#	外

表1のFREQを見ると最低7から最高73まで項目によって大きく変動している。この変動は環境変数とどのように関係しているだろうか? まず項目番号8「薬かんでお湯をわかす」のFREQだけが飛びぬけて低くなっていることが目をひくが、これはこの



項目だけが合拗音部分を仮名で表記していることの結果と考えられるので、項目8は以下の分析の対象から除外する。

表1にとりあげた環境変数は複雑にからみあってリストの音声環境を構成している。そこで各々の環境が合拗音におよぼす影響を評価するにあたっては、複数の環境を同時にFREQの値と結び付けた考察が必要である。この目的のために、林の数量化I類と呼ばれる多変量解析の手法を利用する。²数量化I類は、複数の説明変数の値からひとつの目的変数の値(ここではFREQ)を予測しようとする手法であり、説明変数がカテゴリーデータである場合の重回帰分析である。一般に重回帰分析では複数の説明変数全体が目的変数をどれほど良く予測しているかを表わす尺度として重相関係数を利用し、個々の説明変数が要因としてどれほど効いているかの尺度として偏相関係数を利用する。ここでは重相関係数をRで表わし、偏相関係数をrで表わすことにする。偏相関係数がどの変数と関係しているかを示すために変数を表わす略号の最初の一字をとって添え字とする。WIの場合 r_w 、FSの場合 r_f である。

最初に説明変数として音声環境のすべてV, WI, FS, PSを用いた場合の結果を示すと、 $R=.628$, $r_v=.073$, $r_w=.200$, $r_f=.650$, $r_p=.304$, であった。偏相関係数を見ると要因として一番効いているのはFS, 次がPSである。WIはあまり有効とはいいがたく、Vは全く効いていない。実際、Vを除いて再計算してみると、 $R=.681$, $r_w=.207$, $r_f=.649$, $r_p=.315$, となり、ほとんど変化は生じない。

ところで $R=.681$ という値はあまり高い値とはいえない。音声に関する環境だけでは合拗音の出現頻度を正確に予測することが困難なようである。そこで、音声以外の説明変数として、合拗音が含まれている漢字の字母を加えてみよう。リストには全部で19の漢字が用いられているが、そのうちふたつ以上の項目で用いられているのは「火」(4項目)「回」(2項目)「科」(2項目)「関」(2項目)「外」(4項目)「画」(2項目)の6字である。これらを漢字字母という新しいひとつの環境変数(略号K)のとする6つの異なった変数値とみなし、他の13の字母は「その他」にまとめてひとつの変数値とする。WI, FS, PS, にKを加えて計算を行なった結果は、 $R=.863$, $r_w=.257$, $r_f=.727$, $r_p=.569$, $r_k=.777$ であった。全体として予測の精度が大きく上昇するとともに、変数Kが要因として重要であることがわかる。続いて、リスト項目中に2回以上使用された漢字だけを対象に(この条件下では予測の対象となる項目の数が16に減ずる)、説明変数WI, PS, K*(Kから「その他」を除いたもの)で計算を行なうと、 $R=.924$, $r_w=.828$, $r_p=.611$, $r_k=.910$ であり、予測の精度は極めて高くなる。(なお、ここで説明変数からFSが除外されているのは次の理由による。FSは漢字音である合拗音に後続する分節音を表わす変数であるから、字母K*が決定されれば、その項目のFSの値は全く自動的に知ることができる。つまり、K*とFSとの間に次元の退化がある。このような場合、数量化の計算過程で0による除算が生じるので、計算が不可能になってしまうのである。)

ここまで合拗音の頻度の変動に影響を及ぼす要因を探るにあたって偏相関係数の値だけを問題にしてきたが、各要因(環境変数)の個々の値は具体的にどのような影響を与えているのだろうか。数量化I類の計算では各説明変数の個々の値に数量を与えた上で、該当する変数値に与えられた数量とすべての場合に共通な定数項の合計として目的変数値を予測する。この数量の絶対値と符号によって、それぞれの変数値がどのような影響を与えているかを知ることができる。ここまでに紹介した4通りの説明変数の組合せお

よびWI, PS, K*の組合せで、各変数値に与えられた数量は表2のとおりであった。

表2 数量化理論I類が各変数値に与えた数量

変数名	変数値	説明変数の組合せ				
		V, WI FS, PS	WI, FS PS	WI, FS PS, K	WI, PS K	WI, PS K*
V	+	0.99				
	-	-0.38				
WI	+	1.87	1.86	1.62	0.42	9.80
	-	-2.01	-2.00	-1.73	-0.45	-11.20
FS	a	6.64	6.58	6.50		
	aN	-4.02	-4.15	-1.69		
	atu	-16.41	-16.35	-10.81		
	ai	-0.32	-0.13	-4.82		
PS	i	-0.42	0.11	1.49	-1.42	12.00
	u	-3.62	-3.60	-8.40	-13.70	5.00
	o	2.52	2.54	-1.44	-5.34	-4.00
	N	-4.97	-5.29	-2.93	0.46	1.00
	#	2.73	2.57	4.97	7.95	-3.00
	その他	-1.15	-0.79	-1.12	2.50	-6.00
K	火			12.41	12.24	15.88
	回			12.43	12.26	0.88
	科			-14.83	-14.96	-11.12
	関			-13.51	-13.64	-14.13
	外			0.16	0.55	-5.12
	画			8.80	9.34	2.88
その他			-2.77	-2.85		
定数項		35.28	35.28	35.28	35.28	37.94
R		0.682	0.681	0.863	0.815	0.924

表2中の数量は説明変数の組合せによってかなりの変動をみせるが、次の点は一貫している。(1)WIの値が+の時、数量の符号は正であり、値が-の時、数量の符号も負である。(2)FSではaに正の数量が付与され、aNとatuに負の数量が付与される。(3)Kでは「火」に大きな正の数量が与えられ「科」「関」に大きな負の数量が与えられる。このうち(1)は語頭の環境において合拗音がよく保存されることを表わしており、解釈に格別の問題は生じない。しかし、(2)(3)の解釈にはかなりの注意が必要である。分析的に見るとFSとK(K*)とは、合拗音が置かれた環境を表現するのに、片や形態素を構成する分節音素を単位に記述を行ない、片や形態素そのものを単位に記述を行なった点だけが異なるという関係にある。従って、FSとKの間にはKを決定すればFSは自動的に決定されるという関係がある。そして、偏相関係数を見ても、また表2でFSとK(K*)

に与えられた数量のレンジ(最大値と最小値の幅)を比較しても、後者の方がはるかに大きいのである。

4. 考察：音素・形態素・漢字

この問題はつきつめて考えれば、音変化が生じる言語上の単位として、分節音素を想定するか、あるいは形態素もしくは語を想定するかという問題に行きつく性質のものである。我々のデータに関する限り、分節音素を単位とした FS よりも概略形態素を単位とする K (K*) の方が全体としては数量化理論による予測にはるかに貢献している。音素レベルでは V=-, FS=a として一括される「火」「貨」「科」「果」等の形態素はそれぞれ独立した存在として別個の影響を合拗音に及ぼしている。また、FS=atu の場合に形態素の別を問わずに「月」「滑」「活」などが共通して頻度が低いことなども、ここでは一応分節音素の環境として捉える分析をおこなったものの、実は「形態素内で後続する音素列の長さ」という観点から捉えなおすべき現象なのかもしれない。

総じて、今回の分析結果は山陰地方における合拗音の消滅過程がカリフォルニア大学パークレー校の W.S-Y. Wang らの唱える lexical diffusion に該当することを示唆している。lexical diffusion の理論とは——ごく大雑把にいえば——音変化は該当するすべての語彙項目に同時に生じるのではなく、語から語へと少しずつ語彙目録 (lexicon) の中で拡散していくのだとする立場である。³先に引用した LAJ の解説の表現を借りれば、「環境の違い」よりも「語による違い」の方を重視する立場ということになる。

しかし、それでは LAJ を始めとする各種の資料に見られた一致はどう説明すべきなのだろうか。lexical diffusion によって、音の変化が語彙体系中の一語から別の一語へと拡散してゆく過程が相互に接触のない各方言で一致している理由が考えられるだろうか？ 筆者は、このような一致を生み出した原因は、その一部を日本語の表記体系の特殊性にもとめることができるだろうと考えている。

ここで改めて述べるまでもなく合拗音は漢字音であり、特定の漢字の音読みのみ現われる音声である。従って日本の識字階級にとって、音節/ka/と/kwa/および/ga/と/gwa/の区別の手がかりは、これを漢字の字母に求めることが可能である。この手がかりは合拗音が音韻体系中に確固として存在した時代には全く無用のものであったに違いない。しかし、近・現代における大きな流れとしての合拗音消滅の渦中にある方言、つまりどの語を合拗音で発音するかとの区別がゆらいでいる方言の話者にとっては、漢字が発音上の区別の重要な手がかりである蓋然性が強い、仮にそうであるならば、合拗音で発音される特定の漢字によって表記されることが明確な語の群が、漢字との結合が弱い他の語群に比べて高い頻度で合拗音を保存することがあり得るであろう。表1において、「消火器」(Map 4 参照)「火曜日」など歴史の新しい語が高い頻度で合拗音を保存していたのは、これらの語の語構成が明瞭であり、そして /kwa/ の音が漢字「火」と話者の脳裏で結びつけられている結果ではあるまいか。一方、/suika/ という語の語構成は著しく不明瞭であり、この語を漢字で「西瓜」(あるいは「水瓜」と表記することは多くの話者にとって必ずしも自明ではあるまい。各種資料の一致を生み出した原因のひとつは、この語構成の要素としての形態素と漢字との結合度の違いに求められるであろう。

5. まとめ

山陰地方における合拗音の消滅に影響している要因を数量的に分析した結果、次のふたつの傾向が確認された。まず第一に合拗音は語頭の環境において保存されやすい。第二に合拗音の変化は形態素レベルで生じており、形態素によって消滅の進展には著しい差が認められる。

日本各地の方言に共通するこの差を説明するには、各形態素を表わす漢字の字母の影響を考慮する必要がある。日本人の言語生活において同じ知的意味を表わす音と訓とを漢字が結び付けていることを重要視し、漢字を音声とならぶ意味識別の手がかりとして日本語の言語体系の中に位置づけようとする主張は「文字形態素論」の名で知られている。⁴ 本稿に述べた筆者の解釈は、日本語の音変化に音素、形態素の他に漢字という文字の因子が関係している可能性を示唆しているという点で、上述した「文字形態素論」の基本的主張を支持するものである。

注

- 1 国立国語研究所、「日本語地図1」(大蔵省印刷局、1966)。
藤原与一、「瀬戸内海言語図巻」上巻(東大出版会、1974)。
徳川宗賢、「地域差と年齢差——新潟県糸魚川市早川谷における調査から——」国立国語研究所報告 84 「方言の諸相『日本語地図』検証調査報告」(三省堂、1985)。
- 2 数量化理論 I 類の計算は、統計学プログラムライブラリー-HALBAU によった。
- 3 William S-Y.Wang(ed.), *The lexicon in phonological change* (The Hague: MOUTON, 1977)。
- 4 森岡健二、「文字形態素論」, 森岡健二編著「近代語の成立—明治期語彙編一」(明治書院, 1969)。